

平成 21 年 4 月 27 日現在

研究種目：若手研究 (B)  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18730410  
 研究課題名 (和文) 高次水準リテラシーとしての複数テキスト読解力の解明と教育的支援  
 研究課題名 (英文) Investigating and fostering multiple texts reading abilities as high-order literacy.

研究代表者  
 小林 敬一 (KOBAYASHI KEIICHI)  
 静岡大学・教育学部・准教授  
 研究者番号：90313923

研究成果の概要：大学生の複数テキスト読解力，特にマイクロ・レベル（テキスト全体ではなく，テキスト内の個々の議論）での論争的な複数テキスト間関係を理解する力とそこに及ぼす個人差要因・環境要因の影響，テキスト間関係の理解に基づいて論拠を評価する力を明らかにした。また，複数テキスト読解に密接に関わる力として引用の技術に焦点を当て，それに関する大学生の実態を詳細に調べるとともに，教授介入の有効性を実証した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	900,000	0	900,000
2007 年度	300,000	0	300,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	150,000	1,850,000

研究分野：教育心理学

科研費の分科・細目：(分科) 心理学 (細目) 教育心理学

キーワード：複数テキスト読解力，高次水準リテラシー，大学生，教育的支援

## 1. 研究開始当初の背景

高等教育の場である大学において，いかにして大学生にふさわしい高次水準リテラシーを習得させることができるかが，重要な教育課題になっている。そうした高次水準リテラシーの1つとして「複数テキスト読解力」がある。複数テキスト読解力とは，特定のテーマに対して様々な著者が様々な媒体（雑誌，書籍，ウェブサイト，など）に書いた文章を関連づけながら読んで，そのテーマに関する総合的な知識を得たり，テーマを巡る議論の構図を理解した上で自分なりの意見を生成したりするための土台となる力であり，学問分野を問わず必要な能力と言える。ところが，

我が国ではこれまで，初等・中等教育においてはもとより，高等教育においても，複数テキスト読解について体系的な教育が十分になされてきたとは言い難い。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は以下の2点である(図1参照)。

(1)大学生の複数テキスト読解力と個人差要因の影響を調べる。具体的には，論争的な複数テキスト間関係の理解と，その理解を論拠の評価に活用する能力，引用の技術について調べ，個人差要因として学年，自発的な外的方略利用，既有知識をとりあげ，テキスト間

関係の理解に及ぼす影響を調べた。

(2)複数テキスト読解を促進する条件の特定と教授介入の効果を検証する。具体的に言うと、前者については、特に、テキスト間関係の理解に及ぼす読解目標、外的方略利用の機会、課題表象の明確化の効果を調べた。後者については、引用の技術に及ぼす教授介入の効果を検討した。

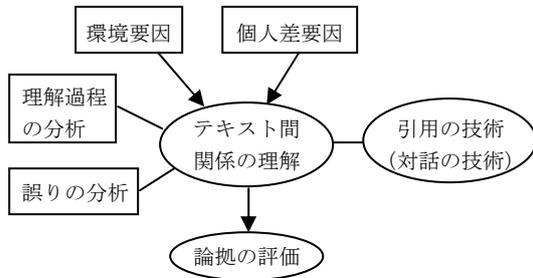


図1 本研究の関係図

### 3. 研究の方法

目的(1)に関してはもっぱら、大学生に論争的な複数テキストを読んで事後課題を行ってもらう集団実験の方法(「研究成果」で触れるようにいくつかの条件を設ける場合もあった)や、発話思考を行いながら論争的な複数テキストを読み、事後課題を行ってもらう個別実験の方法により調べた。

目的(2)に関しては、上記の集団実験の方法により複数テキストが効果的に行われる条件を特定するとともに、大学の授業をフィールドにして、複数テキストの処理(複数テキスト読んでレポートを書く)に実際に介入を試みながら、スキルの変化を半年間にわたって追跡した。

なお、具体的な方法は実験・調査で異なるため、「研究成果」でそれぞれの結果を述べる際に触れる。

### 4. 研究成果

#### (1)テキスト間関係の理解

##### ①テキスト間関係の理解に及ぼす個人差要因の影響

大学1年生86名、3年生80名を対象に、対立する2つのテキストを読んで(テキスト間)関係理解課題、議論再生課題を行ってもらった。学年、既有知識、外的方略(間テキスト的メモ、要約メモ、下線引きなど)の各要因が関係理解に及ぼす直接・間接効果を調べるために、パス解析を行った。

結果を図2に示す。要約メモと学年は直接的にプラスの影響を及ぼすこと、要約メモはまた各テキスト内議論の処理を促進することで間接的にも影響し、既有知識も間接的な影響を及ぼすことが示された。モデルの適合度指標は、 $\chi^2(5) = 4.73, p = .45, GFI = .99,$

$AGFI = .97, CFI = 1.00, RMSEA = .00,$  であり、適合度はかなり高いと言える。

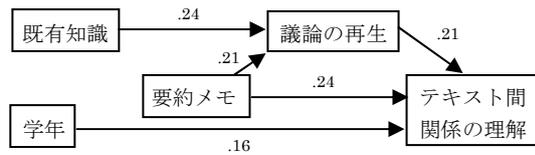


図2 パス解析の結果

##### ②テキスト間関係の理解に及ぼす読解目標と外的方略利用の効果

大学生80名に、ある論点に関してそれぞれ賛成・反対の立場から議論している6つのテキストを読んでもらい、①と同様に、関係理解課題、議論再生課題を行ってもらった。なお、実験参加者は2(外的方略利用:可,不可)×2(読解目標:関係探索,意見生成)のいずれかの条件に割り当てられた。関係探索条件では、その相互関係を考えながら6つのテキストを読むよう教示し、意見生成条件では、論点に対する自分の意見を考えながら6つのテキストを読むよう教示した。外的方略利用可条件は、読解中にメモをとったりテキストに下線を引いたりすることができ、不可条件はそれができなかった。

実験の結果は次の通りである。読解目標ごとに、外的方略の各種類を利用した人数を調べたところ、読解目標に応じて外的方略の利用の仕方が変化すること、特に、テキスト間の関係づけを志向した外的方略(間テキスト的メモなど)の利用が関係探索条件で多かった(85% vs. 35%)。

テキスト内議論の再生については、条件の効果は認められなかったが、テキスト間関係の理解(妥当な関係の数)については、外的方略利用×読解目標の交互作用が有意であった( $F(1, 74) = 11.02, p < .005$ )。下位検定の結果をまとめると、関係探索でのみ、外的方略利用有>無;外的方略利用有でのみ、関係探索>意見生成、であった。先の外的方略利用パターンの結果と合わせると、関係探索が読解目標の場合、テキスト間の関係を探索したり明らかにしたりするために外的方略が積極的に用いられ、それが、テキスト間関係の理解を促進したのだろう。

##### ③テキスト間関係の理解に及ぼす課題明確化の効果

Flower (1991)は、複数テキスト読解課題が与えられた場合、読み手はその課題をどう表象するかが読解過程を左右することを明らかにしている。これを踏まえて、課題表象が十分特定化されていなかったことが、上記①②における理解のつまづきの1つの原因ではないかと仮定し検討を行った。

実験には大学生61名が参加した。その基

本的な手続きは①と同様であるが、各実験参加者は、議論分析+関係探索条件、関係探索条件、統制条件のいずれかにランダムに割り振られた。議論分析条件では、実験参加者に、読解中、テキスト内容のうち論点に関する部分に印をつけてもらった。関係探索条件では、2つのテキストがどのように対立しているかその関係を考えるように教示した。なお、実験に際して、統制、関係探索、議論分析+関係探索の順に課題表象が明確になると仮定した。

テキスト間関係の理解パフォーマンスを従属変数にして、3条件間で差が見られるか検定を行った。しかし、どの条件間にも有意差は認められなかった。上記①②の研究で認められた複数テキスト間関係の理解のつまずきが、課題表象の問題によるという予想は支持されなかった。

#### ④テキスト間関係の理解過程

大学生 30 名に発話思考を行いながら論争的な複数テキストを読んでもらった。それ以外についてはほぼ、②の関係探索条件の手続きと同じである。

関係理解課題の成績を基に実験参加者を高低2群に分け、読解中のテキスト間関係処理がどう異なるか、次の3つの側面から調べた。まず第1に、個別的な争点に関する(2つのテキストにおける)議論間の関係について読解中に触れた人数は、理解高群の方が低群よりも多かった。第2に、議論間の関係づけ方を分類したところ、「関係の指摘」(2つのテキスト内容が関係していることや両者が違うということだけを述べたコメント)や「評価」(2つのテキストを対比させて、その説得力やもっともらしさを述べたコメント)などいくつかのタイプに分けることができた。しかし、これらの各タイプに関して、理解高群と低群の間に意味のある差は認められなかった。最後に、議論間の関係について述べた実験参加者のうち、同じ関係を関係理解課題で挙げた人数を調べたところ、理解高群の方が低群よりもその人数が多かった。

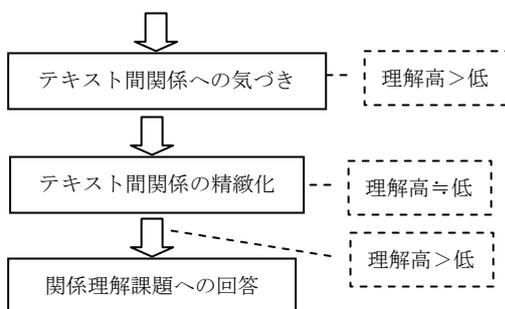


図2 テキスト間関係の理解過程と理解高低群間の差

以上をまとめると、図2のように描くこと

ができよう。すなわち、読解中にテキスト間関係に気づくかどうか、読解中に見出したテキスト間関係を理解テストの回答までつなげられるかどうかにより、理解の高低が産み出されたと考えられる。

#### ⑤テキスト間関係の理解：誤りの分析

①③④の実験で得られたテキスト間関係理解課題のデータ(257名分)を再分析した。具体的には、関係理解課題の回答を1つのテキスト間関係(2人の著者が一致・同意あるいは対立している論点とそれに対する各著者の意見内容)を示す陳述を1とし、さらに、課題の教示に沿った、しかもテキスト内容に照らして妥当な陳述を正陳述、それ以外を誤陳述と分類した(それぞれ、陳述数 393, 317)。正陳述の中身をさらに詳しく調べると、そのほとんどは、3つのタイプ(賛否、早期教育の問題、指導者の問題)のいずれかに分類できた。この3タイプを全て挙げた実験参加者は16%しかおらず、逆に、賛否のみが15%、正陳述なしが20%もいた。テキスト間の適切な関係を捉えることに問題がある者が少なからずいることが窺える。

誤陳述は大きく2つに分けられた。1つのタイプは、テキスト内容に照らして妥当ではあるが、課題の教示に従っていない陳述で、誤陳述のおよそ3分の1を占めていた。ただし、このタイプは、教示の理解や記憶の問題である場合、テキスト間関係の理解そのもの問題とは言えないかもしれない。

もう1つのタイプは、テキスト内容に照らして妥当とは言えない形で2つのテキストを関係づけた陳述である。このタイプはさらに次の3つに分けることができた。A.意見の内容はテキストに照らしてほぼ正確と言えるが、論点のずれた相互に噛み合わない意見をそのまま対比したり(陳述数 61)、提言の内容が共通していないにも関わらず共通点を指摘したりする(陳述数 2)という不適切な関係づけを行った陳述。B.2人の著者の意見が相互に噛み合う形で関係づけられているが、一方または両方の意見内容がテキストに照らして正確とは言えない陳述(陳述数 123)。C.その他の陳述(陳述数 16)。これには主にAとBの混合である。

関係づけの誤りから、大学生が論争的な複数テキスト間関係を理解する場合に問題になるポイントとして、1.2つのテキストに述べられた意見を正確に理解あるいは想起すること(Bに関連する問題)、2.それらの意見を適切に関係づける論点を抽出すること(Aに関連する問題)が挙げられる。なお、Aの誤りのように、噛み合わない意見を対比しているにもかかわらずそれが妥当に見えてしまう理由の1つとして、中心的な論点での対立が引き起こす錯覚を挙げることができよ

う。すなわち、2つのテキストは、小学校英語教育導入の是非という中心的な論点で対立しており、それぞれその是非を根拠づけるために複数の理由を提示している。この構図で考えると、たとえ論点の噛み合わない理由同士を関係づけていても、「賛成の理由 vs. 反対の理由」という関係は成立しており、その結果、その関係づけが妥当に見えてしまうのかもしれない。

### (2) テキスト間関係の理解に基づく論拠の評価

テキスト間関係の理解を基に論拠の評価を行えるか調べた。具体的には、**biased assimilation** の実験パラダイムを応用して、テキスト呈示順序（「テキスト A：論拠+反論→テキスト B：論拠」 or 「テキスト B：論拠→テキスト A：論拠+反論」）が各論拠評価に及ぼす効果を調べ、実験参加者が後のテキストを評価する場合に先に読んだテキスト（特に「反論」部分）を考慮するかどうか検討した。実験に参加した大学生は 96 名である。

争点ごとに「反対の論拠に対する説得力評定値-賛成の論拠に対する説得力評定値」を求め、それらを従属変数、呈示順序を独立変数、事前態度、親近性、重要度を共変量にして **MANCOVA** を行った。その結果、呈示順序の主効果が有意であり ( $F[4, 88] = 3.22, p < .05$ )、さらに下位検定を行ったところ、省エネについてのみ「反対→賛成」>「賛成→反対」であった。また、読解後に実験参加者が書いた論述を分析し、論拠中の反論を肯定する記述、反論に反駁する記述の有無を論点ごとに調べた。結果は Table 1 に示す通りである。

表 1 論述の中で反論を肯定・反駁した人数

	健康		経済		省エネ		ゆとり	
	肯定	反駁	肯定	反駁	肯定	反駁	肯定	反駁
賛→反	14	18	8	24	28	7	18	7
反→賛	15	23	6	22	28	3	18	4

以上の結果をあわせると、少なくとも今回用いたテキストに関して、大学生はテキスト間関係の理解を基にある程度、論拠を評価できると言える。

### (3) 引用の技術と教授介入の効果

テキスト間関係の理解を踏まえて、対立や矛盾を含むテキスト内容を批判的に統合する上で、引用の技術を欠かすことはできない。引用の技術は大きく「記載」と「対話」の2つに分類することができる。記載の技術には、レポート文中に他のテキストから引用した内容がある場合にそのつど、当該箇所がどのテキストからの引用であるかを明記する、引

用したテキストの出所情報を引用文献として記載する、などが含まれる。一方、対話の技術とは、書き手が、テキストの著者と自己内対話しながらそのアイデアを自分のテキストに取り込んでいくための技術である。しかし、以上の技術を大学生が十分に習得していないことを示す証拠は数多くあり、本実験では、そうした問題の詳細を明らかにし、教授介入によりその改善を試みた。

分析したのは、心理学実験の授業を受講した大学生 17 名がその授業で課され作成・提出した実験レポート 6 回分である。授業は、心理学実験の方法や分析、実験レポートの書き方を実際に実験を行いながら学習する授業で、「実験→分析→レポート」というサイクルが 6 つの実験テーマに関して繰り返された。授業者は、提出されたレポートにコメントを書き込み、提出から 1 週間後の授業日に受講生に返却した。引用の技術に対する教授介入は、授業中の教授とレポートへのコメントを通して行った。

(a) 記載漏れと引用漏れ（記載の技術）：1 回目のレポートには、記載漏れ（本文中に引用されている文献が引用文献リストに記載されていない）と引用漏れ（引用文献リストに記載されているにも関わらず、それが本文中に引用されていない文献が存在する）が全受講生に共通して見られた。しかし、これらの問題は教授介入により 2 回目以降大幅に減少させることができた。

(b) 引用のし方（記載・対話の技術）：どのように引用したか明らかにするために、「問題と目的」に絞ってレポートから引用部分を取り出し、1 文ごとに引用文献の記述との対応関係を調べた。その結果、6 回の間にはほぼ丸写しの引用から言い換えを積極的に試みる引用へ改善していた。また「出所不明」の割合も減少した。

(c) 「考察」における引用の有無（対話の技術）：半分以上の受講生が 1 回目のレポートの「考察」部分で先行研究を全く引用していなかったが、2 回目以降、その人数は 1 名にまで単調に減少した。

(d) 引用文献の使い方（対話の技術）：「考察」で文献を引用する場合、文献の使い方にはいくつかのバリエーションが見られたため、それを 4 つのタイプ（知見の一致・不一致、実験結果を解釈するアイデアの源、先行研究の知見と異なる理由の考察、実験結果の解釈を補強する材料）に分類し、各受講生（文献を引用した者のみ）が用いたタイプ数を求めた。レポートの回数を重ねるにつれ、引用文献の使い方が（個人内で）より多様性を増していく方向に変化していた。

### (4) 本研究のインパクトと今後の展望

本研究は論争的な複数テキスト読解の問

題に本格的に取り組んだ国内で最初の研究と言える。複数テキスト読解力の核になるコンポーネントとして、テキストの評価、テキスト間関係の理解、矛盾・対立するテキスト情報の調停の3つが挙げられるが、本研究ではこのうち、(国内外ともに十分な実証的検討がなされていない)テキスト間関係の理解に関する能力やそこに影響する要因を明らかにすることができた。また、従来の研究(e.g., Britt et al., 1999; Rouet, 2006; Perfetti et al., 1999)が主な対象としてきた、テキスト対テキストというマクロ・レベルの関係ではなく、テキスト内容(各論拠)同士の関係というミクロ・レベルの関係に関する理解に焦点を当てた点にも意義がある。

ただし、上述の通り、本研究で明らかにできたのは、あくまでも複数テキスト読解力の一部に過ぎない。また、大学生の読解力を高める教育的支援も引用の技術に限られている。これらは今後に残された課題と言える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ①小林敬一 (2009). 論争的な複数テキストの理解 (2) —誤りの分析—. 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇), 59, pp139-152. 査読無
- ②小林敬一 (2009). The influence of topic knowledge, external strategy use, and college experience on students' comprehension of controversial texts. Learning and Individual Differences, 19, 130-134. 査読有
- ③小林敬一 (2008). 論争的な複数テキストの理解 —発話思考法を用いた分析—. 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇), 58, pp159-170. 査読無
- ④小林敬一 (2007). 複数テキスト読解方略. 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇), 57, pp269-282. 査読無

[学会発表] (計5件)

- ①小林敬一 複数テキストに基づく論拠の評価. 日本教育心理学会第50回総会, 2008年10月13日, 東京学芸大学
- ②小林敬一 論争的な複数テキストの理解における誤りの分析. 日本心理学会第72回大会, 2008年9月19日, 北海道大学
- ③小林敬一 論争的な複数テキスト間関係の理解過程. 日本心理学会第71回大会, 2007年9月19日, 東洋大学
- ④小林敬一 論争的な複数テキストの理解に及ぼす既有知識, 外的方略利用, 学年の影響. 日本教育心理学会第49回総会, 2007年

9月17日, 文教大学

- ⑤小林敬一 論争的な複数テキストの理解—外的方略利用の効果—. 日本心理学会第70回大会, 2006年11月4日, 福岡国際会議場

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

小林 敬一 (KOBAYASHI KEIICHI)  
静岡大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 90313923

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし